
俺の春はナニ色に染まっちゃうの!?

土屋 晴翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の春はナニ色に染まっちゃうの！？

【Nコード】

N7934W

【作者名】

土屋 晴翔

【あらすじ】

親父の事情により幾度となく転校を経験している神河海斗。この数多の転校のせいで青春とはかけ離れた学園生活を送っており、自身はそれを黒春と呼んでいた。高校2年生となった春、そんな彼にまた新たな宣告が下された。「転勤だ」とこの一言。これは海斗を別の学校へ移転させる決まり文句であり海斗の春をより一層、黒く染める言葉なのである。しかし、親父によればこれは最後の転校。願ってもないチャンスが訪れた海斗は果たして、自分の春を青色に染めることができるのか！？ — 俺の春は何色に染まっちゃうの！

?

第1話 ― ゆえに、俺の春は黒いのだ ―

「すまん、転勤だ」

この一言で俺――かみかわ かいと神河海斗の学校生活は幾度となく暗黒時代にさせられてきた。

そして今回も、この一言のせいで俺は黒春（青春の対義語だと信じてる）を満喫することが決定してしまった。

理由は悲しいくらいに簡単。

親の転勤と同時に俺の転校が確定。そして俺は高校二年生。

そう、青春を一番に謳歌できる高校二年生で他校に移ることになる。さらに泣きつ面に蜂、と言うべきなのか高校二年生になって間もない四月半ばでの転校だ。

四月半ばとなると各クラスの生徒達がユニゾンし始めている時期。そんな時に転入したら間違いなく新しいクラスから溢れてしまう。ゆえに黒春である。

しかし、俺は自分でも不思議に思うくらい、この絶望的な現実を素直に受け止めることができていた。

先述の通り、この手の転校を何度も経験しているからかもしれない。

俺は死刑宣告を冷静に対処する。

「そっか。今度はどこに？」

「よくぞ聞いてくれた、息子よ」

俺の言葉を聞いた親父は、顔をニンマリとさせて行き先を告げた。

「今回はなんと『アメリカ』だ！」

「あ、アメリカ！？」

冷静さは一瞬にしてフライアウェイ。

予想外すぎます。

まさかの外国ですか。

すると、俺の悲壮感を感じ取ったのか、親父は救いの一言を続け

様に告げた。

「そんな暗い顔をするな。さすがに外国へ転校などはさせないさ。アメリカには俺とママだけで行く。お前は日本に残って、俺のツテで見つけた学校に転校するんだ」

（なるほど…… ってことは一人暮らしじゃないかつ!!）

一人暮らしが出来るという嬉しさからか、さっきまでのブルーな気持ちは嘘みたいに消え、俺の顔がパァ——ツとなる。

「家とかはどうするんだ？」

自分でもびっくりするくらいにウキウキしながら質問していた。

「その心配には及ばない。転入先の学校には訳ありの生徒用に設けた学生寮があるらしい。そこに住めばいい。詳しくは追って連絡する」

「……わかった」

訳ありの学生寮、というのが少々引かかるが、一人暮らしには変わりないので全力で安堵する。

子供を置いて外国に行く、なんていう両親は放任主義なのでどうしようもない。

「それと転勤はこれで最後だ。今回の転校先では思いっきり青春してこい！」

……転校、という時点でむなしいくらいに青春できないんですよ。いや、こう思うからダメなんだ。

今回、今回こそは青春を堪能してやる。

「おう！」

俺は未来への希望を乗せて声高々と返事をした。

「よし、海斗。色々頑張れよ」

そして何日か経った後、両親は転勤先であるアメリカに拠点を移した。

——かくして、俺は脱黒春を掲げた新しい学校生活を迎えることになったのである。

第2話 ― 始まった新しい生活 ―

―― 数日後。

「オーケー、オーケー。親父よ、次会ったら葬ってやる」

俺は正面にある寮を見上げならそう呟いていた。

現在、俺のいる場所は転校先の学校から徒歩五分程度の場所にそびえ建っている『訳ありの生徒用に設けた寮』の門の前だ。

両親がアメリカへと旅立った後、親父の連絡通りに転校先の学校があるこの街へとやってきた。そして親父が残したメモに書いてある住所を探しながら歩き周り、ようやくここに辿りついたのだ。

親父に殺害予告しちゃうくらい、ご立腹な理由は主に眼前にある寮のせい。

名前はようこ荘と言うらしい。今にも消えそうな字で門に書いてある。

別に俺はネーミングセンスの無さ加減に怒っている訳ではない。

俺が怒っているのは『ようこ荘』のオンボロ加減のせいだ。

ようこ荘は二階建てのアパートで部屋は六部屋。黄色を基調とした壁に屋根は朱色。

ここまでは許容範囲内。

しかし、遠目から見てもわかるボロボロ感はずがに厳しいものがある。

これが本当に俺の住むべき場所なのか確かめるため、もう一度親父から渡されたメモを凝視する。

二度見どころではなく何度も見てみる。

が、残念ながらここが俺のスイートホームらしい。

「幸先よすぎるだろ、俺の黒春」

そう独り言を漏らした。

ついさっきまで夢の一人暮らしが出来る、ということに感極まっ

ていたのだが、今やその感情は行方不明だ。

しかし、いつまでも現実から逃げちゃダメだ、と奮い立たせて自分の部屋へと向かう。

俺の部屋は一〇三号室。

引越しはすでに済んでおり、後は整理整頓するだけの状態なはず。

あらかじめ渡されていた鍵をつかってドアを開ける。

——ガチャッ

その瞬間、何段にも積まれたダンボール達が俺の視野に飛び込んできた。

引越しする際は避けられない道である。

現時刻は午後二時。

この寮に辿りつくまで結構歩いたので休みたい気持ちちが満載なのだが、今日のスケジュールは予想以上に詰まっている。

まず、ダンボール達の除去作業と整理整頓。

外からのオンボロ加減を見る限り部屋も汚いと思っていたのだが、意外にも綺麗だったためか、部屋の片付けには思った以上に力が入るだろう。

片付けが終了したら転校先の『清華学園』に赴いて校長先生と対談。

その後、ようこ荘の寮監に挨拶。これはなによりも先に済ませたかったのだが、寮監は清華学園の教師をしているため今は学校にいるのだ。

挨拶が終了したら、生活必需品を調達するために近くにある清華商店街でショッピング。

それと同時にここ周辺の土地カンを得る。

以上が本日の予定だ。

休んでいる暇などない。

さっそくダンボール達との戦争から始める。

——そして約二時間後。

「お、終わった」

一通り片付けが終わり、整理整頓された部屋に座りながら俺はひたすら満足していた。しかし、今日は時間が惜しい。

「次は校長先生と寮監に挨拶か」

そう言っただけ俺は立ち上がり外に出る支度をして、これからお世話になる清華学園へと向かった。

清華学園は中高一貫校で、そのためか校舎はとても大きく敷地は広い。ここ周辺では最大規模の有名な学校らしい。そんな学校に転校できるのは？親父のツテ？のお陰。

なんでも、親父と清華高校の校長は知り合いで旧知の仲だと言う。数分くらいの交渉でこの転入が決まったのだとか。

俺は今、その清華学園の校門の前にいる。

目指すは高校校舎にある校長室。

校門でドヤ顔をして構えていた二人の警備員に事情を話して敷地内に入り、目的地に到着するため俺は歩き始める。

その途中、下校中の生徒がチラホラと伺えた。

本日は四月二十四日の水曜日。

普通なら学生たちは学校に通う日。

時刻は午後四時過ぎで、生徒達は帰り時なのだろう。

自転車を引いて友達と話しながら帰る人もいれば、携帯型音楽プレイヤーを使用して一人の世界に入り浸り、澄まし顔で帰っている人もいる。

中には男女で手をつなぎながら帰っていくカップルさえもいた。

（リア充、マジで吹っ飛べよ）

そう思わずにはいらなかった。

俺は日常的な光景を横目に敷地内をどんどん歩いていく。最初に見えたのが中学校舎。うわさ通りの大きさである。

その先には巨大なグラウンド。

見る限りでは野球部、サッカー部、アメフト部、陸上部が部活動中だ。みんな眩しすぎる笑顔で直向きに行っている。

「いいな、ああいうの」

ちなみに俺は今までの学校生活を通して部活動はしたことがない。転校が多い、というのが主な理由だ。

仮に部活動をしていても学校を転々としてしまったため、どうにもやる気が起きなかったのだ。

部活は青春の代表例。うらやましい気持ちは確かにあった。

でも、結局、どこの部活にも入部はしなかった。

俺が黒春ロードを突っ走っていた理由のひとつだろう。

感慨に耽りながら目的地をなお目指す。

清華学園は今まで通った学校の中でもずば抜けて広かった。

高校校舎に到着するのにも五分くらいかかってしまったのだ。

「でけーな、高校校舎。中学校舎の倍くらいあるんじゃないのか？」

それが高校校舎に向けての感想だった。

ここにこれから通うのか、と思うとテンションが上がってきた。

そして、最終目的地の校長室へと向かう。

事情は親父が話してくれてあるのだが、やはり緊張するものだ。

なにせ、校長室に入る生徒と言うのは大体が学校内での選ばれし

者（悪い意味で）。

手から汗がにじみ出る。

「でも挨拶はしっかりしないとな」

正面玄関の係員さんに、校門の時と同じ様に事情を話して校舎の中にいれてもらう。

校舎内も見かけどおり広い。そして清潔感がある。

一階には職員室や校長室、面談室等があつて、二階には高校三年生の教室、三階には高校二年生の教室、四階には高校一年生の教室が各十クラスずつあるらしい。

親父にそれとなく説明を受けていたのだ。

目的地は校長室のため、今は階段を利用する必要はない。

真つすぐ伸びている廊下を歩く。

職員室が途中にあつた。寮監はここにいるのだろう。

校長先生との対談を終えたら次はここだな。

そう思いつつ、職員室の隣にある校長室に到着。

ドアの前で深呼吸し、ノックをする。

「失礼します」

「うむ」

そう返事が返ってきたのでドアを開ける。

室内は校長室独特の神々しい雰囲気が漂っていた。

両脇の壁には、木製の棚がならび、数々のトロフィーや賞状が置かれていた。

正面には大きな机と椅子があり、その椅子には一人の男性が腰掛けている。

本日のキーパーソン、校長先生だ。

「こんにちは。神河海斗です」

そう自己紹介をして挨拶をした。

すると、校長先生は席から立ち上がって歓迎してくれた。

「おお、君があいつの息子か。初めましてだな。私はこの清華学園の校長を務めている

桐生護だ。よろしく」

そう言つて校長先生は手を差し伸べてきたので俺も手を差し出す。いわゆる握手というやつだ。

あいつ、というのは俺の親父のことだろう。

「よろしく願います。編入の際は本当にありがとうございます。こんな素晴らしい学校に通えることになるなんて思ってもみま

せんでした」

素晴らしい学校、というのはお世辞ではなく本音だ。

「ははは、喜んでもらえたならこちらも嬉しい限りだ。そういえば、『ようこ荘』に住むんだったな。もう行ってみたと思うが、あんなので本当に申し訳ない」

「そんな、謝らないでください。住む場所を提供してくださっただけでもありがたいですから。それに結構、居心地がいい場所ですよ、ようこ荘」

あんなの、というのはボロいことを言っているのだろう。

確かに最初、ようこ荘を見たときは愕然としたが、案外いい場所だったのは本当だ。

「それはよかった。寮監である姫野先生への挨拶はもう済ませたかね？」

「いえ、まだです。校長先生の挨拶を済ませたら伺おうと思っています」

「そうか。姫野先生は今、職員室にいると思うよ。私への挨拶はこの辺でいいから早く行ってきたさい」

「あ、はい」

突然の挨拶終了のゴングに少々声が裏返ってしまった。

予想通り、寮監は職員室にいるらしい。

「では、よい学校生活を」

校長先生はそう言っ、さよならの挨拶をしてくれた。

「ありがとうございます。失礼しました」

俺は回れ右をして校長室から出る。

やさしそうで親切な人だな、というのが校長先生への感想だ。

なにはともあれ、本日の用事の一つ、『校長先生の挨拶』が終わって俺は激しくホッとしていた。

第3話 ― されど少年は女の子を助けた ―

校長室を後にした俺は、すぐ隣にある職員室のドアの前に辿りつく。

先程と同じ様にドアの前で深呼吸をしてノックをする。

「失礼します。姫野先生はいらっしゃいますでしょうか？」

お目当ての先生と遭遇するため、全力で声を上げる。

しかし、それが仇となってしまい、先生達の鋭い眼光を受ける羽目になってしまった。

恐怖を感じて怖気づく情けない俺。

すると、一人の若い女教師が声を掛けてくれた。

「姫野先生ね。ちょっと待ってて。呼んでくるから」

「あ、ありがとうございます」

先生の存在を改めた瞬間だった。

少しの間待っていると、さっきとは別の女教師がやってきた。

わが住処となった、ようこ荘の寮監である姫野先生だろう。

歳は推測するに二〇代後半で、髪はいわゆるセミロングというやつ。そして教師とは思えない類稀な美貌を解き放っていた。

そんな姫野先生は俺の顔を見て『ああ、君が神河海斗か』みたいな顔をした。

「ああ、君が神河海斗か」

マジで言ってきた。

俺は仕返しとばかりに『はい、そうです』という顔をしながら

「はい、そうです」

と言っただけ。

「よく来たな。まあなんだ。ここじゃ言いにくいこともあるだろうから面談室に行こうじゃないか」

何を察したのかはよくわからなかったが、挨拶だけなので大丈夫です、という旨を伝えるため返答する。

「いえ、ここでも平気——」

すべてを言い切る前に、姫野先生はムツとした顔をして小声で

「私が困るんだ」

と言ってきた。

そう言われてしまえば従うしかない。

「わ、わかりました」

了解の返事を聞くと姫野先生は徐に職員室から出ていき、付いてこい、とばかりにアイコンタクトをしてくる。

俺はなんだかなあ、と思いつつも姫野先生についていき、校長室よりもっと先にある面談室へと向かう。

面談室にはすぐに到着した。姫野先生に準じて室内に入る。

「いや、すまないね。煙草を吸いたくてな。職員室で吸うと周りの先生から煙たがられるんだよ、二重の意味で」

上手いだろう？　と言わんばかりのドヤ顔を披露しながら教師らしからぬことを言つてのける姫野先生。

先生、という存在をまた改めてしまう瞬間だった。

美貌がもつたいないよ。

姫野先生は面談室の窓を開け、机を挟んで設置されてある二つの椅子の一つに腰を掛ける。そうすると必然的に俺は向かい側の椅子に座ることになる。

俺が着席するのを確認した姫野先生は煙草を吹かしながら続けて口を開いた。

「話は変わるけど、ようこ荘にはもう行つてみたんだろう？　感想はどうよ？」

やっと本題に突入。

「ボロいけど親しみやすい場所だな、というのが率直な感想です」
「確かにあれはボロいよな。でも親しみやすいのならなによりだ。
久しぶりの住人だからな。寮監としても嬉しいよ」

笑みを浮かべながら姫野先生は言う。

そこで、俺はふと疑問に思ったことを口にする。

「……久しぶりの住人ってことは今、ようこ荘に住んでいる生徒は俺だけってことですか？」

確かにようこ荘の一階にある三部屋はまるで生活感がなかった。二階は見えてないのでわからないが。

「そういうことになるな。でも、近いうちにまた増えるがね」

「近いうちに？」

「いずれわかるさ。それより一つ頼まれて欲しいことがあるんだが

……」

「？」

俺は思いつき『なんですか？』という顔をする

「ビールを買っておいで欲しいんだ」

「え………？」

問題発言を連呼するので思わず、普段出ないような声が出てしまった。

「いやな、今日中に終わらせたいことがあって帰るのが遅くなりそうなんだ。お願いしてもいいか？」

生徒にビールの買い出しを頼む先生ってどうよ、とは思ったりするが、この後に控えている『清華商店街でショッピング』のついでだ。

「……わかりました。買っておきます」

「助かるよ、ありがとう。ビールは共有のキッチンにある冷蔵庫で冷やしておいてくれればいいから」

共有のキッチンというのは文字通り、ようこ荘の住人が共有するキッチンのことだ。

ようこ荘では他にも、ダイニングルームと風呂などが共有となっている。

寮らしいと言えば寮らしい。

続けて、姫野先生は何かを思い出したかの様に言葉を告げる。

「そついえば神河。唐突だが、お前のクラスは二年七組だ」

本当に唐突である。

超重要事項がビールのお願いの後に伝達されるという大番狂わせだったが、俺のクラスは二年七組に決定した。担任は誰なのだろう。「ちなみに担任は誰なんですか？」

「私だ」

「……………」

しばしの沈黙。

「だから、お前をクラスに紹介するのも私ってことになるな。打ち合わせ等必要か？」

「いえ、大丈夫です。普通に紹介してくれば」

「そうか、転校は慣れているんだったな。じゃあ挨拶はこの辺にしよう。学校のことについてはようこ荘でまた詳しく話す。ビールの方、頼んだぞ」

「はい」

返事を聞くと姫野先生は椅子から立ち上がり、所持していた灰皿ケースに煙草の吸殻を詰め込んで面談室から出ていく。

「じゃあ、またな」

そう言って職員室へと帰って行った。

……なんていうか、姫野先生の人間性が一瞬でわかった様な気がする。

姫野先生、ぱないつす。

まあ、寮監との挨拶も終了したので、もう清華学園に用はない。俺も椅子から立ち上がり、面談室から出る。

そして俺は次なる目的地、清華商店街へと向かった。

DQNすぎる姫野先生との対談を終えた俺は高校校舎の正面玄関にいる係員さんに会釈をして清華学園内の敷地に出る。

しかし、トラブル発生。俺は青春を謳歌しちゃってるカップル達を目撃してしまった。

本日二度目の青春謳歌軍団を見てしまったため、俺は悶絶する。傍から見れば変態だったであろう。

精神が安定するのに少しの時間を要した俺は校外に出るため正門に向かい、問題なく到着した。

相変わらずドヤ顔で構えていた警備員二人に、これからほぼ毎日これを見なければならぬのか、と思いながらも会釈を済まして下校。

目指すは清華商店街。

清華商店街はようこ荘と清華学園の中間地点に位置しており、ここから二、三分程度で着く。清華学園に来る途中、この商店街を見かけたのだが、想像を絶する大きさだった。ここに来ればなんでも揃えると言っても過言ではないくらいに。

俺はそんな場所に行くため、元来た道を歩く。

現時刻は夕方の五時。

時間も時間なのか、子連れの親御さんが何人も伺えた。「今日のよるご飯はなにー？」と言う子供を見ていると昔の事を思い出す。

記憶のページを捲りつつ、夕焼けに染まる道を歩いていると件の清華商店街が見えてきた。買い物客で賑わっているためか、人通りも多い。

「うっ、こんな混雑した場所に行かないといけないのか……」

明日からはもうちょい時間を考慮して行こう、と思いながら清華商店街へと入っていく。

本日の目的は晩飯の材料と明日から使う文房具等の調達。……それとビール。

買い物を開始する。

——そして一時間後。

「ここは戦場か……」

それが買い物を終えた感想だった。

晩飯はカレーライスを作ろうと思い、じゃがいもやにんじんなどのレギュラーメンバーに加え、隠し味としてりんごを調達した。人並みには料理が出来るためこちら辺はお手の物である。

その後、文具店で学生の武器であるノート&シャーペンを購入。前から使っていたものがあるにはあるのだが、新しい学校で心機一転するために一新した。

そして、姫野先生からオーダーされたビールを買って、今はようこ荘へと遠回りして向かっている。

理由はここ周辺の土地カンを得るため。これからこの街に住むにあたっては最重要項目だ。

日はもう沈んで空は真っ暗だが、街灯があるため心配はない。

今、俺がいる場所はようこ荘から少し離れたところにある路地裏の様な場所だ。こんな所まで来る意味だが、自然と足が動いてしまった。

ここはさつきと打って変わって人通りは少ない。

ヤンキーとかいてもおかしくない。

と、すぐ目の前にある曲がり角の一手手前で俺は足をとめた。

物騒な声が聞こえてきたからだ。

「おい、姉ちゃん、かわいい顔してるねー。どう？俺達と遊ばない？」

ヤンキー……。想像通りで泣けてくる。

予想するに、曲がり角の先で一人のかわいい少女が数人のヤンキー達に囲まれて強制連行されかけている状況だろう。

俺がもし、どこかの主人公だったら、この混乱のさなかに駆け込んで少女を助けるというラブコメ的展開に発展したはず。

でも、残念ながら俺はパンピー。

飯に飛び込んで行ってもフルボッコにされて終了する。これが悲しい現実。

俺はこの現場からいち早く立ち去るため、まわれ右をして引き返すことにした。

だが、その瞬間、

——カッンッ

という甲高い音が無残にも響き渡る。

音源は俺の右手。

手提げ袋に入っていたビールの缶が壁に当たってしまったのだ。

（姫野先生——ッ）

音に気がついたのかヤンキーAが奇声を上げる。

「あ？　そこに誰かいんのか？」

詰んだ……。

俺は瞬時に三つの選択肢を頭に思い浮かべる。

A 逃げる。

B 全力で逃げる。

C かつてないスピードで逃げる。

……情けなすぎるだろ、俺。

（このままじゃ、これから先ずっと黒春だ）

そう思った俺はこの際、フルボッコでもしょうがないと混乱のさなかに駆け込んだ。

設定は『待たせていた彼女を買い物してきた彼氏が連れ戻しに来た』だ。

「いやー、連れがお世話になりました。今日の晩御飯はお前の好きなカレーだぞ？」

と言いながら、手提げ袋を左手に持ち替えて空いた右手で少女の手をつかむ。

「ちょ、え！？」

突然のパンピーの登場に少女は驚きを隠せないでいたが、もう、どうでもいい。無事にスイートホーム（ようこ荘ね）に帰りたい。

「あ、んだ、てめえは？」

スキンヘッドのヤンキーBが声を上げる。

「こ、こいつの彼氏です。いやーホント失礼しました。では！」

そっいつてヤンキー相手にまくし立てる。

「は？ なめてんのかよ？ クソが！ やっちまうぞ！」

両耳にピアスをしている金髪のヤンキーCが反撃してくる。

お決まりの感じで嫌になる。

フルボッコだけは勘弁してください。

俺は先ほどの選択肢Cを決行するため少女に声をかける。

「走るぞ！」

ヤンキー全三人から逃げ切ることができるか終始不安だったが、少女の手を引きながらかつてないスピードで逃げる。

どこを走っているかなんてもう知らない。

全力でひたすら走るだけ。

「クソ！ 待ちやがれ！」

ヤンキーAが激昂しているが、無視。

かれこれ五分くらい走り、ようやくヤンキートリオから逃げ切ることが出来た。

ヤンキー達はおそらく、たばこを吸っているため体力が低下していたのだろう。

「はあ……はあ……」

俺と少女はぜえーぜえー言っている。

「とりあえず、逃げ切れたな。……大丈夫か？」

「……うん……ありがとう……」

俺はその時、初めて少女の顔を拝んだ。走ることに必死でよく見ていなかったのだ。

……ヤンキー達の目は節穴ではなかった。

見るからに歳は俺と同じくらいで、目はくつきりして大きく、整った顔立ちをしている。髪は綺麗な栗色で肩まであり、ボディーもグラビア顔負けの素晴らしい出来栄だ。

端的に言えば美少女そのものである。

そんな少女は続けて口を開いた。

「あの……手……」

「あ、ごめん」

俺は我に返って、瞬時に手を離す。

「い、いえ……大丈夫です……」

心なしか少女の顔が赤くなっている様な気がした。

「あの、ここは？」

俺は少女の言葉にハツとして、辺りを見渡す。

……知らない場所だ。

この街に来て半日しか経っていない俺にわかるはずがなかった。

「ワカリマセン。まだこの街に来て間もないんだ……」

俺は正直に打ち明ける。

すると、少女も困った顔をして

「私もなんだけど……」

「え？」

「明日ここに引越すから下見にと思って来たらさっきの人に囲まれて、それで……」

うん、なるほど。

率直に言おう。

——迷子だ。

「どこまで行けばわかるの？」

「清華商店街まで行けば……」

この危機から脱出するため、携帯を取り出してナビ機能を使用する。

文明に感謝です。

「わかった。清華商店街まで一緒に行こう」

携帯の画面を見せながら俺は言う。

それで少女も安心したのか、

「あ、ありがとう」

と、眩しすぎる笑顔を解き放ちながら言った。

結局、二十分くらい歩いて清華商店街（戦場）に到着した。

ここに辿りつく間に少女とは色々話した結果、タメというわけあってか打ち解けていた。

「あ、ここまで来ればわかる！ ホントに今日はありがとう。助けてくれて」

「お、おう」

笑顔がとても似合う女の子である。

「その……かつこよかったよ」

「え？」

声が小さくてよく聞き取れなかった。

「い、いや、なんでもない！ んじゃ、私行くね」

「おう。気をつけてな」

「うん。じゃ、またね！ バイバイ！」

そう言って少女は手を振って最寄りの駅の方へ消えていった。

俺は久しぶりの女子との会話に心が跳ね跳びそうだった。しかも美少女と。

しかし、そんな有頂天も一瞬で終了する。

俺はあることに気付いてしまったのだ。

「あ、名前も連絡先も聞いてないじゃん」

……………。

なるほどね。

自分が黒春を全うしている人間であることを改めて認識した瞬間だった。

マイスイートホーム、ようこ荘に帰って枕を濡らすしかない。そう思うほかなかった。

第4話 ― ようこ荘での安息 ―

世界の不平等を切に感じた俺は美少女と別れた後、マイスイートホームようこ荘に帰宅して思惑通りに自室の枕を涙で濡らした。

「俺の人生に『青春』という二文字は刻まれないのかよ……」

そう、呟きながら。

俺の体から水分がどんどん失われていくうちに時刻は八時くらいを回ってしまった。

約一時間、瞑想（迷走じゃないよ）をしたことになる俺はネバーギブアップを心がけてベッドから腰を持ち上げ、六畳一間の部屋に立ち上がる。

ようこ荘の部屋は片付けの際にも思ったが、意外にも綺麗にされており、居心地のいい場所だ。

「とりあえず、腹も減ったし飯でも作るか」

我が家に帰宅してからまだ晩飯を食べていなかったことに気づき、ようこ荘の敷地内に設備されている共有ルームに向かう。

共有ルーム、というのはようこ荘に居住している人が共有するところになっているキッチンやダイニングルーム、風呂などが設備されている場所だ。

少々不便だが、利点もある。

今はまだ俺と姫野先生しかここには住んでいないが、人が集まっていこうちに寮生ぐるみでご飯を食べたり、料理を一緒にしたり等できる点だ。

寮生活の醍醐味であろう。

なんていうか、青春っぽいよね。こういうの。

ようこ荘生活一日目にしてワクワクしている俺は靴を履き替えて外に出る。

すると、門の辺りに人影が見えた。

セミロングな髪と解き放たれている美貌の持ち主はあの人しかい

ない。

あの人、もとい姫野先生は俺の姿を確認すると徐に口を開いた。

「おー、神河か。ただいま」

「おかえりなさい、先生。遅くなるって言っていましたけど、結構早かったですね」

「ああ。案外、早く終わったのでな。それよりどこに行くのか？」

外に出ている俺を見ておかしく思ったのかそう質問する姫野先生。

「いえ、共有ルームで晩飯をと思ひまして」

「まだご飯を食べていなかったのか。ちょうどいい。私の分も作ってくれ」

「カレーライスですけど大丈夫ですか？」

「カレーライスか。私の好物だ。楽しみにしておこう」

顔をほころばせながら姫野先生は言った。

手伝ってほしいな、と思う俺。

「あの手伝って——」

「今のうちに言っておくが、私の料理は人の命を削るレベルだ。自殺願望がある時のみ、協力を要請してくれ」

さようですか。ポイズンクッキングスキルをお持ちなのですね。

「わ、わかりました」

「そう言えば、頼んでおいた例のブツは用意万端か？」

例のブツ……ビールのことか。

「はい。ちゃんと冷えていますよ」

ビールのせいでフルボッコにされかけましたけどね。

「そうかそうか。じゃあ先に風呂入るから準備の方、頼んだぞ」

姫野先生はそういうと、ようこ荘の二階の方へと消えていった。

たぶん、自室は二階にあるのだろう。

俺は姫野先生の分も作ることを念頭に置きながら、共有ルームへと向かった。

歩いて一分もしない場所にある共有ルームの間取りは、まず玄関があつて、そこから長い廊下が伸びている。突き当たった場所に十

畳くらいの広さのダイニングルームがあり、キッチンもそこに設備されている。風呂は玄関近くにある角を右に曲がったところにある。そんな場所に到着した俺は晩飯を調理するためにすかさずキッチンに向かい、料理にとりかかる。

――一時間後。

「で、できた！」

今までで一番出来がいいんじゃないかってぐらいのカレーライスを前に俺は全力で浸っていた。

ちょうどいいタイミングで玄関の方から物音がする。

姫野先生も風呂で一日の疲れを癒し終えたのだらう。

出来た料理達をダイニングルームにある食卓に準備しているとダイニングルームのドアが開いた。

「おお、いい匂いだ。私の期待に伝えてくれよ？ 神河」

語尾を間延びさせながら姫野先生は言う。

「料理には自信があるんで大丈夫っすよ。安心して召し上がってください」

「そうか。ではさっそく頂くとしよう。お前も早く来い」

姫野先生は食卓の椅子に座りながら俺を手招きする。

「了解です」

俺は冷蔵庫からビールを取り出し、姫野先生の待つ食卓へ向かう。「仕事終わりのビールは最高だからな。お前も大人になればわかる！」

ビールの登場に感極まったのか先生のテンションが半端なく上がる。

そんな先生は続けて口を開いた。

「なんていつても今日はお前の初ようこ荘ディナーだからな。楽しいこうじゃないか」

そつえばそうだった。結構馴染んでしまっていたためか、実感

がわからない。

「では食べましょうか」

「そうだな。……もう九時か。ちょっと遅いが食べるとしよう。じやあ、頂きます」

「頂きます」

俺と姫野先生は両手を合わしながら挨拶をして同時にカレーライスを口に運んだ。

「う、うまいぞ！ 神河！ 絶妙な味加減だ」

「あ、ありがとうございます」

「これから料理担当を任せる。もうこれでコンビニ弁当生活も終了だな。明日から頼むぞ」

俺のようこ荘での役割分担が決まりました。料理担当らしいです。「わかりました」

「そうだ。ついでにようこ荘のシステムを説明しないとな」

俺の作った料理を勢いよく平らげながら先生は言った。

「まず、洗濯や掃除は当番を割り当ててそれをローテーションで回す。と、言っても今は私とお前だけだから、主に神河だ」

「え！？ 先生はやらないんですか？」

「私は家事全般向いてないんだ……。そのためかこの歳になってもシングルなんだぞ？ そんな私にやらせるのか？」

なるほど。そんな美貌をお持ちなのに結婚できないのはそういうことか。

同情した俺はとりあえず謝りながら引き受ける。

「すいませんでした。俺がやります」

「よし。でも安心しろ。直に人が増える。ここの食糧費等は玄関にようこ荘生共通の財布を置いておくからそこから出せ」

俺はコクリと頷く。

「ようこ荘の仕組みはこの辺だろう」

そう言いながら、なお先生の手は止まらない。

余程、お腹が減っていたのだろう。

ものの五分程度で完食してしまった。

「ふう。おいしかったぞ。ごちそうさま」

「お、お粗末さまです」

そう言うしかなかった。

「学校のことに關してなんか質問とかあるか？」

「いえ、特には。あ、先生の担当教科はなんですか？」

「数学だ。生徒達には裏で悪魔と呼ばれているらしい」

めちやくちや宿題出す人キタ——ッ。

「宿題……多いんですね……」

「まあな」

満面の笑みを見せる悪魔。

「あ、そういえば校長先生に会ったそうだな。感想はどうだ？」

「え？ いや普通にやさしそうで親切なひとだなって……」

「そう見えるだろ？ それが意外や意外。うちの校長は見た目とは裏腹にイベント好きで破天荒な人だ。一か月後に開催される体育祭なんてもはや戦争だぞ。用心しろよ？」

「……………」

マジですか。戦争って。人間って見た目に騙されてはいけませんね。

「いまの時期は全生徒、体育祭の練習を猛烈にやっているころだ。神河も精進してとりかかれよ」

「は、はい！」

戦争って言っても体育祭は体育祭だ。青春の代表例の一つである。頑張ろう。

「うむ。そろそろ私は寝るとするか。今日は色々と大変だったからな」

「お疲れ様です。片付け等は俺がやとくんで大丈夫ですよ」

「そうか、助かる。お前も夜更かししないで早く寝るんだぞ？ 転校初日に遅刻なんてしたらクラスの評価が凄いことになってしまうからな。それに明日の転校はお前にとっていい思い出になるだろう。」

こんなことは滅多にないからな」

「な、なんかあるんですか？」

意味深なことを言う先生に疑問をぶつける。

「明日のお楽しみだ。じゃあ私は寝るな」

「……わかりました。おやすみなさい」

姫野先生は椅子から立ち上がって少し残ったビールをグビツと飲み干す。

「あ、そうだ。お前に一つ言っておかなければならないことがある」
「なんですか？」

「ようこ荘へようこそ！」

姫野先生はニヤツつとしながらそう言つと自室へと帰って行つた。

「『ようこ荘へようこそ！』って……」

センスのないダジャレだが、姫野先生なりの歓迎の言葉なのかな、と思うことにして割り切つた。

「俺も風呂入って早めに寝るか」

そう言つて俺は残ったカレーライスを平らげて、今日を終えるための行動に移したのだった。

第5話 ―アナザー転校生―

――ピピピピピピッ

七時ジャストにセットしておいた目覚まし時計が室内に鳴り響く
「わぁぁっ！」

俺、起床。

昨日は結局、晩飯の片づけを終えて風呂に入り、十一時くらいに就寝した。

俺は朝に弱いタイプなのだが、早く寝たせいか目覚めがいい。
冬になると魔性のアイテムと化す布団から体を出して、自室である一〇三号室のカーテンを開ける。すると、溢れんばかりの朝日が差し込んで来て目がかすんでしまう。

「いい天気だな。転校日和だ」

そう。今日は転校初日。転校生にとって初日は超重要。
自己紹介でどれだけクラスに好印象を与えるかが、俺のこの先の運命を左右する。

「よっしゃ。頑張るぞ！」

人には聞かれたくない独り言で気合いを充填する。
と、ドアから女性の声が聞こえてきた。

「オ、オホン。気合入魂中悪いんだが伝達事項だ」

……………

聞かれてしまいました、ハイ。

声の主は俺が今住んでいるようこ荘の寮監であり、担任の姫野先生だ。

「は、はい？　なんででしょうか？」

羞恥心のせいで声が若干裏返る。

「学校に登校したらまず職員室に來い。色々と準備があるからな」
「……………了解しました」

転校生は初日からクラスへ普通に入ってしまうと『おい、誰だ、

アイツ』みたいな感じになってしまったため、職員室で待機して担任の紹介と共にクラスに入って行くのがセオリー。なので、初日は職員室登校だ。

「あーそれと、学校が終わったら風呂の掃除とか頼んだぞ」

そう。俺——かみかわかいと神河海斗は現在、家政婦の様な任を負っている。おまかな理由は姫野先生が家事全般できないという点と家事のローテーションを回そうにも寮生が俺しかいないからだ。新しい住居人が来るまでの辛抱である。

「わかりました。先生はもう学校に行くんですか？」

「ああ。私はもう行く。朝飯、ちゃんと食べて来いよ。それじゃあな」

その言葉を最後に姫野先生の声はもうしなくなった。学校に行つたのであろう。

とりあえず、俺も学校に行く準備をしないと。

神河海斗、始動！

——そして十五分後

共有ルームの風呂場にある洗面所で顔を洗って歯を磨いた後、昨日買っておいた朝飯用の菓子パンを調達しにキッチンへと向かい牛乳と一緒にイート。

その後、自分の部屋に戻って教科書やノート等を学校指定の鞆に入れる。筆箱の中には今まで使っていた物に加え、昨日買ったニユーシャーペンも入れておいた。

ちなみに俺は朝、学校の準備とかする派です。（誰得だよ、というツツコミはやめてくれ）

今は清華学園の制服にコスチュームチェンジ中。

清華学園の制服は黒いスラックスに白いワイシャツと青色のネクタイ。その上に紺色のセーターだ。新品のせいか少しゴワゴワしている。

「よし、準備完了!」

忘れ物はないか確認して、ようやく朝の準備を終える。

現時刻は七時二〇分。

清華学園の登校時間は八時二〇分。一時間くらいの余裕がある。

まあ、でも早めに出て損することはない。

清華学園はここから歩いて五分程度の場所にある。朝が弱い俺にとっては超メリツトだ。

学校指定の革靴に履き替えてようこ荘の門をくぐり、通学路へと出る。

いざ、清華学園へ。

そして特に問題なく到着。

正門には相変わらずドヤ顔で構えている二人の警備員がいた。これから本当にほぼ毎日見ることになりそうだ。

俺は件の警備員と挨拶を交わして清華学園の敷地内に足を踏み入れる。

昨日来てみてわかったことだが、この学園は無駄に広い。高校校舎に辿りつくまでに五分くらいかかってしまう。

そんな敷地をひたすら歩く。

部活の朝連なのか、グラウンドでは眩しすぎる汗を流しながら各々の部活が活動をしている。

活気溢れるグラウンドの前を通過すると高校校舎が見えてきた。

これからお世話になる場所である。

なんとなく一礼。

未だ出席番号等わからないので生徒玄関は使用できない。奥にある来客用の正面玄関を使用する。

正面玄関には昨日と同じ係員さんがいた。

会釈をして中に入れてもらう。

そのまま、真っすぐ伸びている廊下に行く。

と、職員室が見えてきた。

ドアの前に立ち止まり昨日と同様ノックをする。

「失礼します。姫野先生はいらっしゃいますか？」

昨日は大きな声を出したせいで先生達の鋭い眼光を受ける羽目になったので今度は小さな声で言う。

「おお、神河か。結構早いな。気合い十分じゃないか（含笑）」

偶然、ドア付近にいた姫野先生が声を掛けて来た。

「からかわないで下さいよ。先生！」

「ハハハ、すまん。ついな。お詫びと言ってはなんだが、お楽しみの種明かしをしようじゃないか」

お楽しみ……昨日言ってたやつか。

「種明かし？」

「まあ、ついてこい」

そう言うつと姫野先生は職員室から徐に出て歩きだす。

なんだかなあ……と思いつつも俺は仕方なくついていく。

ハッ——デ、デジャヴだ。

到着したのは案の定、面談室。

姫野先生がドアを開けて入っていくので、俺もそれに続いて入っていく。

瞬間、一人の女の子が俺の目に飛び込んでくる。それも見覚えのある女の子だ。肩まである綺麗な栗色の髪とくっきりした大きな目に加えて整った顔立ち。まさしく昨日襲われていた美少女。服装は清華学園指定の制服で紺色のプリーツスカートに白いブラウスと赤いリボン。その上に白いセーターだ。

「「あ」」

と、感嘆の声がハモる。

「君は！」

「あなたは！」

そんな言葉を昨日の美少女と交わす。

「お、なんだ？ 知り合いなのか？」

「は、はい。昨日、たまたま遭遇しまして……」

俺は姫野先生の質問に返事しながらも驚きを隠せなかった。

向こうの女の子も同じみたいで啞然としている。

「そうか、丁度いい。神河、これがお楽しみの種明かしだ。なんと同じ日に転校生がダブルで編入することになった。そしてクラスも同じ」

驚きに驚きをかぶせて来る姫野先生。

「そ、そんなことがあっていいのか……」

「昨日も言っただろう？　うちの校長は破天荒なのだ。こんなことがあっても不思議じゃないさ。まあ、神河も座れ」

昨日とは違って、一つの机に椅子が三個ある。

俺は美少女のとなりに座るよう促される。

「こんな偶然ってあるんだねっ！」

美少女は気軽に話しかけてくれた。

俺はオドオドしながらも言葉を返す。

「お、おう。まあ、これからよろしくな」

「うんっ！　よろしく！」

千カラットくらいの眩しい笑顔を放ちながら美少女は言う。

「なにがあったかは知らないが、仲が良くてなによりだ。まず自己紹介からしようか。私は姫野百合ひめのゆりだ。君たちの担任兼数学の教師を担うことになる。よろしく」

姫野先生のフルネームが発表された。百合ゆりというらしい。

「俺は神河海斗かみかわかいとです。改めてよろしくお願いします」

「姫野先生に海斗君か。私は天音美月あまね みつきです。よろしくお願いします」
一番知りたかった美少女の名前は天音美月あまね みつき。

「よし、この辺だろう。学校のことに関しては追々聞くとして。っ
といま何時だ？」

姫野先生は腕時計に目をやる。

「……七時五〇分か。ちよっと私は朝礼会議に行かないといけないから、ここで談笑でもして待っていてくれ。チャイムが鳴るまでここから出ないでくれよ？　ダブル転校生ってわけもあって在校生達の

間ではビツクな話題になってるんだ。見つかるやうと少々厄介だ」

そう言つと、姫野先生は面談室から出て行つた。

俺たちは結構注目されているらしい。今まで何度も転校を経験しているが、こんなことは一度もなかった。先生の言う通り今日はいい思い出になりそうである。

と、気付けば二人きり。

……やばい。

美少女と二人きり、なんてシチュエーションはいまだかつて一度もない。

そんな俺を見計らつてか、美少女の方から声を掛けてくれた。

「ホント奇遇だね。びっくりしちゃったよ」

フレンドリーな女の子で助かりました。ここでの沈黙が一番つらいです。

「だね。天音さんは――」

「天音さんだなんて。普通に美月でいいよ。昨日の今日だし。私も海斗君つて呼ばせていただきます！」

呼び捨てOKサインが下りました。昇天しそうです。

名前で呼び合つてなんていうか仲のいい友達っぽくていいよね。「んじゃ、遠慮なく。美月は親の事情なんかで転校することになったの？」

「うん。まあそんな感じかな。お父さんの転勤が多くつてさ。今回で六回目だよ？ そのせいで学校を転々としちゃってあまり友達とかないないんだよね。海斗君は？」

残念そうな口ぶりで美月は語る。

ものすごく境遇が似ているためか、やけに親近感が湧いた。

「似たような感じかな。親父がアメリカに転勤することになって、さすがに外国に転校は無理だろ、ということどこに引き取つてもらつたんだ。今回で五回目かな、転校は。美月と一緒に俺も友達はあまりいない方だよ」

てか、いません。

「そうなんだ！　じゃあ私達は転校生同士、これからは友達だねっ！」

「お、おう！」
「すげえ嬉しいです。転校早々、こんなに可愛い子と友達になれるなんて。」

その後も会話は途切れることなく、色々な話題で談笑を繰り広げた。

と、そこで。

——キンコーカーンコーン
チャイムが鳴った。

俺にとっては試合開始のゴングの様なものだ。
鳴り終わると同時に面談室のドアが開く。

「よし、二人とも準備完了か？」

姫野百合、二十代後半（独身）の登場。

「はい！」

俺と美月は勢いよく返事をする。

「海斗君、自己紹介頑張ろうね！　お互い慣れてるだろうけどさ」
美月はニコニコしながら言う。

「おう」

俺もそう返事をして美月と一緒に姫野先生の後をついていく。
三階にある二年七組という名の、リングに上がるために。

「えー、静かにしてくれ」

ドア越しでもわかる姫野先生の声。鶴の一声と言うべきなのか、
先生がそう言うのと二年七組の生徒達は一斉に静かになった。

俺と美月は今、教室のドアの前で先生の『よし、入れ』という言葉
葉を待っている。

「今日は皆に、二人の転校生を紹介したいと思う」

すると、さっきの静けさはどこへ行ったのか、

『っしやー、やっと来たか。ダブル転校生!』

『待ってました! 美女カモ——ンッ!』

『いいぞ! カムヒア——ッ!』

等々、エキセントリックな声達がクラス中を飛び交っている。

(さ、さすがに緊張してきた……)

ふと、隣を見てみると美月も少々、困惑の色を見せていた。

「こ、こんなに歓迎されるとは思わなかったね……」

と美月が口を開く。

「……だな。転校生の待遇がこんなに良い時なんて、今回が初めてかもしれない」

事実、俺は今まで、計五回ほど転校を経験したが、クラスがこんなにざわつくのを見たことがない。

「はい。静まれー。宿題増やすぞー」

と、悪魔こと姫野先生がそう言うのと、一瞬にしてクラスが静寂に包まれる。

先生、やっぱパネエっす。

「よし、入れ」

待っていた言葉がやっと、告げられた。

「いよいよ、だね。お互いにがんばろ!」

と美月。

「おう」

と俺。

そう言葉を交わした後、俺がドアを開けて二年七組の教室に入っていく。

姫野先生によるとクラスの人数は俺達を含めると全四十名らしい。

『うおおおお! 女の子方、超可愛い!』

『ホントだ! 神様、ありがとー!』

『やべー、マジ天使ッ!』

など、美月を称える言葉が教室中に響き渡る。オタクも少々、混じっているらしい。

俺は美月の宝石の様な輝きによって空気と化していた。

——これが現実です。

美月と一緒に、スタスタと黒板の中央あたりまで歩いて教卓に上がる。

「うむ。じゃあ、自己紹介の方を神河から頼む」

と、姫野先生から白いチョークを渡される。

自分の名前を黒板に書け、ということだろう。

俺は黒板にデカデカと自分の名前を書いた後、前に振り返って用意しておいた自己紹介スピーチを始める。

「神河海斗です。神様の神に河川敷の河、海水の海に北斗七星の斗で、神河海斗です。約一年間、このクラスでお世話になる予定です。よろしくお願いします」

黒板に書いてあるにも関わらず、漢字の説明をする俺。

緊張してます、ハイ。

すると、姫野先生が、

「もっとマシな自己紹介があるだろ！」

と笑いながら、俺にエルボーをかます。

そのお陰で、教室にも待望の笑いが起きた。

ひとまず、俺終了。

次は美月の番だ。

チョークを渡してバトンタッチ。

美月も自分の名前を黒板に書き終え、自己紹介を始めた。

「私の名前は天音美月って言います。短い間ですが、よろしく願います」

言い終えた瞬間、

『ヒュ——ッ！ 美月ちゃん、ヒヤホ——ッ』

『天音さん、ヨロシク——ッ！』

『ありがとう、そして、ありがとう！』

と、またクラスが美月を称賛する声でいっぱいになる。

（お、俺の時はなかったぜ……）

「はい、静粛に！ 座席だが、神河は窓側の一番後ろ、天音は廊下側の一番後ろだ。少しスペースがあるから各自、机といすを運んで席につけ！」

『廊下側、せけえぞ！』

『うわー、女神よ！ なぜ、美月様は廊下側に……』

『ああああああああ、どうしてこうなった！』

と、窓側の雰囲気がかオスになっていく。

（お、俺がいるじゃないか……）

再び突き付けられた現実には涙が出そうになる。

「以上で朝のHRは終了だ。一時限目に遅れないようにしろよ！」

そうすると、クラスの日直が「起立、礼」と言ってHRを終えた。

「よかった。無事に終わったね。机といす、取りに行こ！」

さっきの困惑の色は見せず、よく似合っている笑顔を振りまきながら美月は言う。

「おう！」

俺はその笑顔にデレデレしながらも、返事をして賛同する。

『お、俺が運ぶの手伝いますっ！』

『いや、俺だっ！ テメエはひっこんでろ！』

『君こそ、どっかに行ってくれないかな？ 僕がお運びするんだ』

……美月の方だけに人が集まったのは言うまでもない。

結局、美月はそれらを断って、俺と一緒に机といすを運んだ。

俺は窓側で、美月は廊下側。正反対の場所で少し残念だが、しょうがない。

美月は運び終えた後、肉食の男どもに囲まれてチャホヤされていた。

うらやましいな、と思いつつ、俺も席に座る。
すると、窓側にいた何人かのクラスメイトが、

「神河君、よろしくね！」

「ナイス、自己紹介だったよ（笑）！」

「わからないことがあったらなんでも言っ
てね！」

と、声を掛けてくれた。

正直、ものすごく嬉しかった。

「ありがとう！　こちらこそ、よろしく！」

テンションが上昇したせいか、少し上ずった声で返事してしまっ
た。

親父に死刑宣告された時、また黒春を満喫することになるのか、
と思っ
てはいたが、今までにない最高のスタートダッシュを切れた。
俺の春は青色とまではいかないが、灰色ぐらいには染まった……
と思う。

黒春が灰春になった！　と心の中でファンファーレを流しながら
俺は満足した。

なにはともあれ、神河海斗の新しい学校生活が幕を開けたのだっ
た。

第6話 ―お約束なアレ―

――キーンコンーカンコン

響き渡るチャイム。四時間目終了の合図だ。

結局、自己紹介を終えた俺は無事に四時間目までを終えていた。美月はというと、四時間目までの休み時間（計三回）のすべて、クラスの男子やダブル転校生の噂を嗅ぎ付けて訪れた他クラスの男子に囲まれていた。

もちろん、俺の方にも人は来たが、「あ、なるほど」みたいな顔をして五秒も経たないうちに美月の方に流れて行った。

男はつらいよ……。

まあ、こんな感じで今は昼休み。

弁当を持ってきたている生徒もチラホラと伺えたが、俺は寮生活で一人暮らし。朝早く起きて弁当を作る気にはなれないので、清華学園の食堂にお世話になることを前々から決めていた。

食堂は高校校舎一階のエントランス付近に設備されている。クラスメイトから聞いた情報によると結構混むらしい。

急がなくては、と思いながら俺は食堂へ行くため教室のドアに手を掛ける。

と、その時、後ろの方から声がした。

「あ、海斗君！ 今から食堂？ 一緒に行こうよ」

声のした方に振り向くと、美月の姿があった。

「お、おう」

いきなりのお誘いにびっくりしながらも、返事だけは一応する。

「じゃ、行こっか」

そう言つて、美月は教室のドアを開けて廊下を歩き始めた。俺もその後を追う。

美月と会話したのは朝のHR以来。先述の通り、休み時間の度に色々なクラスの男子に囲まれていたため、話そうにも話せなかった

からだ。

「なんていうか、お疲れ様って感じだな」

「え？」

「いやさ、休み時間の度に男子に囲まれて大変そうだって」

「ああ、大丈夫。ありがと」

「一瞬で人気者だな。うらやましい限りだよ」

「……人気者ってわけじゃないよ」

急に美月は顔を暗くして、

「私さ、男の子はああやってしてくれるけど、女の子からは好かれないんだよね。だから朝も言っただけど、今までの転校先で友達は一人も出来なかったんだ」

と、美月は打ち明けてくれた。

確かに美月の周りに、女の子が集まる描写はなかった気がする。

好かれないのはたぶん、嫉妬のせい。いきなり現れた転校生がチヤホヤされれば不快に思うのは当然のことだろう。

でも、それはあまりにも理不尽すぎると俺は思う。

そのせいで悩んでいる美月を見ると余計に、だ。

「大丈夫。今は俺という友達がいるだろ？」

自然と言葉が出ていた。

言った後、これがどれだけ恥ずかしい言葉が気付いて悶絶したのは言うまでもない。

そんな恥ずかしワードを聞いた美月は、

「ああは、ありがと。こんな暗い話はもうナシナシ！ 食堂、早く行こっ！」

と、笑って対処してくれたので助かった。

そして、件の食堂に到着。

クラスメイトの助言通り、ものすごく混んでいた。

「わっ、すごい人。噂通りの賑わいだね」

「ああ、夕方の清華商店街みてえだ」

昨日の清華商店街がフラッシュバック。

「パンとか残ってくれてるとありがたいね」

「あ、ああ。だな」

結局、十分並んで買ったのがカレーパンとあんパンと牛乳。美月も似たような感じだ。

「うー……」

「これはひどすぎる収穫だよな」

俺達は食堂のカウンターに座りながら愚痴っていた。

「弁当とか作ってもらえないのか？ 母親とかに」

「たぶん、無理かな。今日から私、一人暮らしなんだよね。色々あつてさ」

家庭の事情は人それぞれだ。かくいう俺も一人暮らしなわけだし。「そっか。引越しかはもう済ませたのか？」

「うん。いま荷物とか運ばれてると思う。帰ったらダンボール達と格闘しなきゃだよ」

俺もその道を通ったぜ。がんばれよ、美月殿。

「海斗君は？」

「俺も一人暮らしだよ、昨日から。だから弁当は無理な方向だな」

「そっかあ。なんていうか、ホント私達って似てるよね」

「だな」

こんな感じで、俺達は談笑しながら昼休みと一緒に過ごした。

「そろそろ教室に帰ろっか。五時限目始まつちやいそうだし」

俺はコクリとその提案に頷き、教室へと向かった。

食堂を後にした俺は美月と別れ（トイレ？ と聞いたら怒られました）二年七組の自席に座って、ある不安要素について試行錯誤していた。

不安要素——となりの席の子が学校を欠席しているという点だ。

一見、なにが不安なの？　と思うかもしれないが、転校生の俺にとっては心が苦しくなってしまうくらい不安な案件なのである。

仮に、その子が明日学校に登校したとしよう。そして、となりに着席している俺を見たとしよう。

そう。「あなた、誰？」的な展開が待っているのだ。

これは少々しんどい。

自分が転校生だから仕方のないことだとわかっていても「あなた、誰？」は心に響く。

結構、俺、シルキーハートなんです。

なので、今は友達がいないため（い・ま・は・だ・よ？）その展開をどうやって切り抜けるかを五時間目が始まる合間を縫って考えていた。

そして約五分にも及ぶシンキングタイムを経て出た結果。

——笑顔を振りまきながら、「あなた、誰？」と言われる前に自己紹介をする。

はい、こんなことはどうでもいいですね。ごめんなさい。

と、俺が人生の時間を無駄にし終えたと同時にチャイムが鳴った。若干、頭に栄養が行き届いてない国語教師がやって来る。五時間目開始だ。

俺は笑いを堪えながら残りの二時限を乗り越えようと心を引き締めた。

そんなこんなで終礼。

教室に姫野先生が入ってきて、

「ええー、特に伝達事項はない。気をつけて帰れよ。今日の掃除は窓側の一列な」

と言ったので、

『今日、窓側ツいてね——ッ』

『クソー。今日は部活があるのに……』

『あー。なぜ俺は廊下側じゃないんだ』

と、遠まわしに俺の心にダメージを負わせる発言を窓側のクラスメイトが言った。

いやー、泣きそうです。

タイミングを見計らってか、日直が周りの騒ぎを一掃するように「起立、礼」と言う。

あ、ありがとう。日直さん！

姫野先生はというと、俺に向かって「帰ったら、風呂の掃除とか忘れんなよ？」的な睨みをしてきた。俺は「はい、わかっています」という主旨の思いを目に託して睨み返す。すると、姫野先生は「よし」みたいな睨みをして教室を出て行った。

目を交わすだけでわかるくらい親しくなっています。はい。

「ねえー海斗君。一緒に帰ろうと思ったんだけど、掃除当番なのかー」

突然、背後から天使の声が聞こえてきたので声がした方向に振り向く。——美月だ。

「そうなんだよね。待っててって言いたいけど、今日ダンボール戦争があるんだろ？ 先帰っていいぞ。明日一緒に帰ろうぜ」

一緒に下校のお誘いを受けたことに心臓がバクバクしながらも出来る男子を装って返答する。

「……そうなんだよね。ありがと。今回はお言葉に甘えて先帰るね。バイバイ！」

「おう。じゃあな」

美月は手を振りながら教室から出て行き帰宅した。

（こ、これ、リア充ってやつなんじゃ！？）

しかし、一瞬でそんな幻想は冷めた。

クラスの男子共が俺を睨んでいるからだ。

親しくなくても、この睨みがなにを意味しているかわかる。

「あ？ んだテメエ。俺の美月ちゃん、とるんじゃねえよ？」

「転校生がいきがるなよ？」

「次はねえからな」

等々の意味を含めたガン飛ばしだ。

俺は反省の気持ちで全面に出す。それでクラスの男子共は満足したのか、各自、鞆を持って教室から退室した。

ふう、と思いながら学校生活の中で一番面倒くさい掃除当番の任を執行する。

結局、掃除は三十分くらいかってしまい、時刻は四時を回ってしまった。窓側の列の生徒の中に俺と美月のワンシーンを目撃したやつがいたのか、コミュニケーションをとってくれる雰囲気ではなく、黙々と掃除を終えたという結果になった。

「明日、明日は頑張ろう」

そんな独り言を相変わらずドヤ顔で構えている警備員に挨拶しながら呟く。

「ああーそうだ。風呂の掃除をしなきゃいけないんだ……」

姫野先生の睨みを思い出しながら清華学園の初登校を終えて、俺は帰宅路についた。

——五分後。

マイスイートホーム、ようこ荘に到着。

何回見てもボロい外装にため息をつきながら自室の一〇三号室に向かう。鞆を置いて制服から私服にコスチュームチェンジを完了させる。いざ風呂場へ。

靴に履き替えて共有ルームへと向かう。

風呂場は共有ルームの玄関から入って、すぐ右に曲がった先にある。

「掃除終わったら、買い物だな」

自分に言い聞かせるように言いながら歩く。

そして、浴室に続く脱衣所の前に到着。

よし。ピカピカに磨いてやるぜ。

そんなことを思いながらドアに手を掛けて開けると

脱衣所に湯気をまとった見覚えのある美少女が立っていた。
一糸まとわぬあられもない姿で。
端的に言えば全裸。

「えええええっ——ッ」

俺はあまりの天国すぎる展開に絶叫していた。

美少女の髪は綺麗な栗色で、整った顔立ち、そしてグラビア顔負けの引き締まったボディ。そんな彼女は俺の顔を見てキョトンと
していた。

脱衣所は女の子特有のシャンプーの匂いで充満しており、女の子の全裸と魅惑的な香りのダブルパンチによって俺はトリップしかけていた。

「……………」

いかんいかん。

冷静になるんだ、俺！ 整理しろ。この状況を整理するんだ。

しかし、俺の前に立っている全裸の美少女の方が先にクールダウンしていた。

全裸の美少女は、顔を完熟したトマトの様に赤くして、手に持っていたバスタオルを体へと巻き付ける。

そして、ここぞとばかりに手を大きくテイクバックさせて、

「へ、変態——ッ！」

俺の頬を平手打ちした。

いわゆるビンタ、というやつだ。

お、親にもぶたれたことないのに……とボケる暇もなく浴室内は「パチンツ」という効果音が響き渡る。

ビンタの痛みによって状況を整理したのか、俺はなによりも先にこう叫んだ。

「な、なんで美月がようこ荘にいるんだよっ!？」

第6話 ―お約束なアレ―（後書き）

第7話は10月10日に投稿したいと思います！

ではb

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7934w/>

俺の春はナ二色に染まっちゃうの!?

2011年10月10日03時18分発行